明石の十八年

――明石君の年齢をめぐる試論――

竹内正彦

一、明石入道の述懐

明石の四月。趣向を凝らした夏の装束を身につけた光源氏は、夕月のもと、明石の海を眺めていた。先月、嵐が吹き荒らしていた海の面もいまはどこまでも穏やかであり、淡路島までも見わたすことができた。久方ぶりに琴を掻き鳴らした源氏に、明石入道は琵琶と箏の琴を持ち出し、互いに弾き鳴らす。異郷の浜辺には楽器の演奏に合わせて歌う声や拍子をとる音が響いていった。供人にも酒が振る舞われ、その夜は憂き世のもの思いも忘れてしまいそうな時間が流れていったという。

明石入道が、これまで胸のうちに秘めていた思いを源氏に語り出したのは、そうした夜の限なき月が入り方になるままに澄みまさっていく頃のことであった。

いととり申しがたきことなれど、わが君、かうおぼえなき世界に、仮にても移ろひおはしましたるは、もし、年ごろ老法師の祈り申しはべる神仏の憐びおはしまして、しばしのほど御心をも悩ましたてまつるにやとなん思うたまふる。そのゆゑは、住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年になりはべりぬ。女の童のいときなうはべりしより思ふ心はべりて、年ごとの春秋ごとにかならずかの御社に参ることなむはべる。昼夜の六時の勤めに、みづからの蓮の上の願ひをばさるものにて、ただこの人を高き本意かなへたまへとなん念じはべる。前の世の契りつたなくてこそかく口惜しき山がつとなりはべりけめ、親、大臣の位をたもちたまへりき。みづからかく田舎の民となりにてはべり。次々さのみ劣りまからば、何の身にかなりはべらんと悲しく思ひはべるを、これは生まれし時より頼むところなんはべる。いかにして都の貴き人に奉らんと思ふ心深きにより、ほどほどにつけて、あまたの人のそねみを負ひ、身のためからき目をみるをりをりも多くはべれど、さらに苦しみと思ひはべらず。命の限りはせばき衣にもはぐくみはべりなむ、かくながら見棄てはべりなば、浪の中にもまじり失せね、となん掟てはべる。（「明石」二―二四四～二四六頁）[1]

明石入道がぽつりぽつりと問わず語りに語り出したことは、ひとり娘である明石君に掛ける思いであった。住吉の神に祈願し始めて十八年。日々の六時の勤めの際にもひたすら娘のことばかりを願ってきた。父が大臣であった自分はこうした受領に身を落としてしまったが、この娘には生まれた時から頼みとすることがあり、その実現のために辛い目にもあったが、まったく苦しみとも思わない。もしもその願いが叶わず自分が死んだら、海に入ってしまえと言い含めている――。明石入道は、自ら語ることによって己の苦衷に満ちた半生を想い起こしたのであろうか、時おり嗚咽の声を漏らしながら光源氏に告白した。

それは語り手が「すべてまねぶべくもあらぬこと」と断わるように

特異なものではあったが、光源氏がこうした状況を聞いたのはこの時が初めてではない。かつて北山に瘧病の治療に出かけた光源氏の気を紛らわすために、良清の口からこぼれたのがこの明石入道の噂話であった。そこでは、明石入道について、「大臣の後にて、出で立ちもすべかりける人の、世のひがものにて、まじらひもせず、近衛中将を棄てて申し賜れりける司なれど、かの国の人にもすこし侮られて、『何の面目にてか、また都にもかへらん』と言ひて頭髪もおろしはべりにけるを、すこし奥まりたる山住みもせで、さる海づらに出でゐたる」生活をし、娘に対する国司たちの求婚にも首をたてにふらず、「『わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを、この人ひとりにこそあれ、思ふさまことなり。もし我に後れて、その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね』と、常に遺言しおきてはべるなる」（「若紫」一―二〇二～二〇四頁）と語られていた。都の人々にとって明石入道はどこまでも「世のひがもの」として映っていたのであった。大臣の子であり、近衛中将でもあった入道が、播磨の国守となり、土着、出家して、高い望みをかけて娘の養育に心血を注ぎ、「この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね」と遺言しているという良清のこの噂話[2]に、供人たちは「海竜王の后になるべきいつきむすめななり」「心高さ苦しや」と笑い、光源氏は「をかしと聞きたまふ」のであった（同・二〇四頁）が、それから九年後、光源氏は明石入道自身の口からその特異な半生を聞くことになったのである。

この時の光源氏は、北山での態度と異なり、入道の話を「うち涙ぐみつつ」聞く（「明石」二―二四六頁）。光源氏の、北山における「をかし」から、明石における「涙ぐみ」への変化については、さまざまな事由を考えることができよう。たとえば、「古昔のものをも見知りて、ものきたなからずよしづきたることもまじれれば、昔物語などせさせて聞きたまふに、すこしつれづれの紛れなり」（同・二三八頁）とあるように、明石の地に来て以来、源氏は入道を近くに伺候させ、昔物語を語らせるなど、入道の人柄に触れ得たことがあげられよう。あるいは直前の場面で楽器を取り交わしながら演奏しており、この場のあり方が魂の交感ともいうべきものによってふたりの距離をより深いところで縮めたのかもしれない。また、入道の語りも、異常とも思えた言動よりも、むしろそうならざるをえなかった、いかんともしがたい動機の方を名状しており、源氏の心を揺さぶったのでもあろう。しかしながら、入道の物語を「涙ぐみつつ」聞く主たる理由は、「ものをさまざま思しつづくるをりから」（同・二四六頁）と語られるように、源氏自身による事柄が大きかったとおぼしい。源氏は、入道の問わず語りの後、次のように口を開く。

横さまの罪に当たりて、思ひかけぬ世界に漂ふも、何の罪にかとおぼつかなく思ひつるを、今宵の御物語に聞きあはすれば、げに浅からぬ前の世の契りにこそはとあはれになむ。などかは、かくさだかに思ひ知りたまひけることを、今までは告げたまはざりつらむ。……

（同・二四六頁）

明石入道の物語によって、光源氏は、なぜ自分はここにいるのか、つまりはなぜ都を追われるように須磨に下り、天変によって死の淵をさまよい、さらにはこの明石の地まで流れてきたのかを思い合わせたのであった。それは藤壺との罪の報いではなく、入道の祈りによる神の加護なのであり、しかもそれはここ数年のことではなく、十八年も以前から祈願され続けられてきたことなのであった。入道の物語は、そのような感慨を源氏に抱かせたのであった。確かにこの感慨には入道の娘に興味を持った源氏の、やや大仰な言い回しが含まれているようにも感じられる。しかし須磨の天変の折、生死の境をさすらいながら、住吉の神をはじめとしてさまざまな霊験に出会った源氏であってみれば、入道の物語は真実の響きをもって源氏に迫ったものであったと考えてよいだろう。

住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年――。天変の後に発せられたこのことばは、逃れがたい宿世を源氏に実感させ、源氏と明石君との出会いを必然のものとしているといえよう。またこの「十

八年」といった年数は、これから具体的に物語に参入してくる明石君の造型に深く関わっており、物語におけるその意味は決して看過できるものではない。この「十八年」という年数をめぐって、明石君の造型との関わりを探りつつその物語における意義を考えてみたい。

二、「十八年」をめぐる諸説

「住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年になりはべりぬ」といった明石入道のことばは、研究史上、明石君の年齢の問題とぬきさしがたく存在してきた。[3]『源氏物語』本文には明石君の年齢を明示する記述はないが、すでに古注釈において、この「十八年」を明石君の年齢として読みとる試みがなされている。たとえば、『弄花抄』は「十八年」について「明石女歳也（歟）　北山物語不審」（源氏物語古注釈集成・桜楓社・七八頁）と注して、「十八年」を明石君の年齢とするが、こうした理解が成り立つのは、明石入道による住吉の神への祈願と明石君の誕生が同年であるとの解釈による。「若菜上」巻において、明石女御の若宮出産を伝え聞いた明石入道は、長大な消息を送ってくるのであるが、そこには明石一族の歴史と宿運とが書き記されていた。それによれば、「わがおもと生まれたまはむとせしその年の二月のその夜」、自身の子孫から中宮と帝とが生まれ、自分は極楽に往生するといった内容を示す夢を見て、その実現を期して明石に下向、土着して「この浦に年ごろはべりしほども、わが君を頼むことに思ひきこえはべりしかばなむ、心ひとつに多くの願を立て」たのだという（「若菜上」四―一一三～一一四頁）。この消息文においても立願の時期は明示されてはいないが、瑞夢の実現を切実に願う明石入道が、明石君生誕に遅れず住吉の神にそれを願ったと考えると、『弄花抄』が唱える「明石」巻十八歳説が成り立ち得る。今西祐一郎は「入道が「願はくは一人の子を賜び給へ」と神仏に祈請したとは、物語は語らない。しかし、明石の君が父入道に、そして明石一族にもたらしたものは、「申し子」でなければできないような「幸い」であった」と述べ、[4]明石君の誕生に「申し子」譚的要素を指摘するが、物語の構造から考えても、瑞夢と明石君の出生、そして住吉の神への祈願には密接な関係性を認めることができる。須磨の天変の際、明石入道は明石から光源氏を迎えるために舟をしたててやってきたのであるが、その理由について、明石入道は「去ぬる朔日の夢に、さまことなる物の告げ知らすることはべりしかば」（「明石」二―二三一頁）と述べている。光源氏の夢枕にたった桐壺院の霊が口にした「住吉の神の導きたまふままに、はや舟出してこの浦を去りね」（同・二二九頁）とのことばと照らし合わせると、入道の夢に現れてその霊験を予告したものは、住吉の神であったと読むことができるが、明石君出生の折にもたらされた瑞夢もまた、このような神のごときものがそれを見させたと考えることもできよう。冥々の力によって押し進められる明石一族の物語のあり方からしても、『弄花抄』の提示した、明石入道が明石君誕生とほぼ同時期に住吉の神に祈願したという読みは妥当性のあるものといい得るのであった。

しかしながら、その一方で、『弄花抄』自身が「北山物語不審」としているように、明石君十八歳説にはその当初から「不審」がつきまとってきた。『弄花抄』の指摘する「北山物語」とは「若紫」巻における明石一族の噂話をさす。

「さて、そのむすめは」と問ひたまふ。「けしうはあらず、容貌心ばせなどはべるなり。代々の国の司など、用意ことにして、さる心ばへ見すなれど、さらにうけひかず。『わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを、この人ひとりにこそあれ、思ふさまことなり。もし我に後れて、その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね』と、常に遺言しおきてはべるなる」と聞こゆれば、……

（「若紫」一―二〇三～二〇四頁）

ここにおいて、「代々の国の司など、用意ことにして、さる心ばへ見す

なれど」と語られ、すでに明石君には「代々の国の司など」の求婚者があるとされる。現行の年立によれば、「若紫」巻では光源氏は十八歳であり、「明石」巻の九年前にあたる。「明石」巻において明石君が十八歳とするならば、「若紫」巻では九歳ということになり、男性の求婚、しかも「代々の国の司」の求婚を受けるのは不自然であるとされるのである。古注釈においては、たとえば、『孟津抄』が「入道か祈請十八ヶ年也娘十八歳に成也これにうつらせ給は住吉明神の御利生と入道心也誕生のとしより祈請たるへし　弄ニ北山物語不審云〻」(源氏物語古注釈集成・桜楓社・上巻・三一九頁)と、「住吉明神の御利生」を重んじて、十八歳説をとるものもあるが、『細流抄』は「むすめの年十八歳にてはあるへからす願をたてはしめしより十八年なるへし」(源氏物語古注釈集成・桜楓社・一三一頁)とし、『岷江入楚』も「聞書」として「若菜の下に委く見えたりむすめのとし十八歳よりはたけたるへししからは願をたてはしめしより今年まて十八年なるへし」(源氏物語古注釈集成・桜楓社・第二巻・一三二頁)と述べ、「十八年」を祈願の年数として、明石君の年齢を「十八歳よりはたけたる」ものとしてとらえる。また、『湖月抄』も「師説」として「或説云、明石上十八歳にてあるべからざるにや。そのゆゑは若紫巻にて、良清が語し時代代の国司など、けしきばみよるなどいへり。今十八歳ならば、そのとき九歳なるべし。又年の不同もあるべきにや」(学術文庫・上・六五七頁)として、矛盾の根拠を明確にしながら十八説に対して不審を投げかけている。

「明石」巻において、明石君が十八歳でないとすれば、何歳と想定されるのだろうか。この問題にその具体的な年齢を提示したのが阿部秋生であった。阿部は「若紫」巻において明石君が求婚を受けていることから、十二、三歳から十四、五歳になっていたとし、「それから九年後の明石の君の年齢は、少くとも二十一、二歳になってゐるはずである」と推定した。[5] この二十一、二歳説は、それ自身、説得力を持つものであるが、その後も、藤井貞和が「生誕と同時に願を立てたものとみず、もうすこし目鼻がととのってきてから神に祈誓したものとすれば、たとえば三歳のとき願を立てれば「明石」で明石上は二十一歳」とし、[6] 伊藤博が「光二十七歳の年のことだから、明石の君は光より九歳年下となり、光が親代わりに養育した紫の君よりさらに一つ下ということになってしまう」ことから、「明石の君の年齢を四、五年加算すべきであろう」とした[7]ように、異なる視点からもおおむね支持されてきたのであった。

こうした二十一、二歳説に対して、高橋和夫は、まず十八歳説を「若紫巻でさえ九歳の少女で、良清が求婚するということ自体滑稽になる」として退け、二十一、二歳説についても「娘の誕生を都においてだとするためには、国司任期をどこかで縮める必要があり、または秋の臨時の除目の折にでも播磨守になったとしなければならない」として疑念を呈したうえで、「明石」巻において明石入道は光源氏に「嘘をついた」ととらえ、「この時明石御方の年齢は、若くて二十六歳、上限は三十一歳にまで設定出来ると思う」とし、[8] 明石君の推定年齢を大幅に引き上げたのであった。[9]

しかしながら、「明石」巻における明石君の年齢を引き上げる考え方に対して、あくまでも十八歳としてとらえる見解もある。丸山キヨ子は「代々の国の司」などが、その「心ばへを見」せたといっても、噂を聞いて心を惹かれただけの話で、顔を見た人など一人もいない筈だし、年令も分らない筈である。この上もなく秘蔵の姫君だということで、周囲が心をときめかせただけの話である。それゆえに、明石君は、明石巻で、入道に、あのように話される時点で十八歳で少しもおかしくない」として、十八歳説をとる。[10] また、濱橋顕一は、年立による解釈を厳しく批判しながら「読者は、この印象に忠実に、あれこれの年次上の詮索をしないで、ただ若紫の叙述のそこここを想い起こしながら、須磨・明石の叙述の一々を読み進めればよいのではなかろうか」との立場から「最も大胆に比喩的にいえば、明石の時点で〝ほぼ十八歳〟と判明する明石の上は、回想される良清の噂話の時点においても、〝ほぼ十八歳〟なのであり、代々の国司が求婚していたのも、当然な

のである」とする。[11]

こうした明石君の年齢についての研究史をふまえ、現代注釈書における解釈も揺れている。「今、明石の娘は、十八歳以上のはず」[12]、あるいは「十八」を娘の歳とすると、若紫巻では九歳ということになり、不自然（湖月抄）」[13]などと注して十八歳説を疑問視するもの、あるいは「住吉の神に願がけをしたのが娘の何歳の時であったかわからないので現在の娘の年は不明。ただし十八歳以上であることは確かである。「若紫」の巻にすでに、代々の国司がけしきばみよれる、とあるが、現在十八歳とすると「若紫」の巻の時、九歳となって、幼なすぎるが、あとから見れば、やはりこの時十八歳ぐらいと思われる。作者の誤りである」[14]、「入道が、願を立てはじめてから十八年で、娘の年齢はそれよりも上とする説もあるが、源氏にふさわしい妙齢の女性を登場させるというこの局面の必要性から、前後の統一を無視した例である。この種のことは、一般に当時の物語としては珍しくない」[15]などとして、「若紫」巻との矛盾は認めながらも、明石君の年齢を十八歳とみているものもある。[16]

このようにおさえてくると、「明石」巻における明石君の年齢は、下限で十八歳、上限では三十一歳と、実に幅広く多様に解釈されているのが現状のようである。[17]そうした状況に対して、阿部秋生の見解を「従うべき見解と考えるが、当面の問題は明石の君の年齢の算定にあるのではない。彼女の誕生が播磨国に下向してからではないということ、すなわち、娘が生まれてから後、というよりも、異数の戦慄すべく輝かしい未来を指示する夢とともに娘が生まれてきた、そのことゆえに入道が都を捨てて播磨国に下ることを決意し、かつそれを実行したのだということを押さえておきたいのである」と述べ、明石君の年齢の具体的推定よりも、数奇な運命に押し出されていった明石一族の物語のあり方に注目を促した秋山虔の言辞[18]は、年齢の推定に固執して物語の内実から乖離することに対する警句として胸に刻むべきものと考えられるが、このおおきくぶれる年齢の問題は、明石君の造型を考えるうえでも看過できないものと思われる。「明石」巻において、明石君はいったい何歳と考えることができるのだろうか。いま少しその年齢について考察してみたい。

三、異郷の時間

明石君が「明石」巻において十八歳であるとしたら、現行の年立によるかぎり、彼女は「若紫」巻で九歳の娘ということになり、その少女ともいえる娘に対して「代々の国の司など」が求婚しているという状況が生じる。とくに「代々の」という記述からすると、九歳よりももっと早く、幼児といってもよい年齢の折に求婚が始まっていることになり、これが明石君の年齢解釈のぶれを生じさせる起因となっている。この矛盾を解消するために、みてきたように年齢を引き上げる解釈や、矛盾を認めつつも年齢を引き上げずに考える見解が提出されてきたのであったが、この明石君の年齢の問題を考えるにあたって、おおきな示唆を与えるのが小嶋菜温子の次の見解である。

そもそも、明石巻から逆算するならこの時に、娘は十歳足らずのはずだ。諸注いうように、結婚問題が取り沙汰されるのは、不自然の感を否めない。構想のレベルで引き起こされた不整合として、これを説明することもできよう。が、これも『竹取』引用から、解読されるのではなかろうか。明石の物語は、かぐや姫の求婚譚から始まったのではないか。『竹取』引用の始動を、この若紫巻に見ておきたいと思う。……入道の拒絶の姿勢は、明石巻ではいずれ、娘自身のものとなろう。拒否する女君の物語として、明石の物語は出発するだろうことは想像に難くない。[19]

小嶋は「明石の物語は、かぐや姫の求婚譚から始まったのではないか」として、『竹取物語』の引用から明石君の年齢の問題についての解読を試みている。明石君はかぐや姫を原像として、求婚譚を抱え込みなが

ら物語に参入してくるとの把握である。もちろん、かぐや姫求婚譚の引用そのものが明石君の年齢の問題を解決するわけではない。しかし、引用といった視点を導入するまでもなく、明石君にかぐや姫を想起することによって、その年齢の問題を解くための、ひとつの有効な視界が切りひらかれる。かぐや姫は、誕生直後から求婚を受けた女性だからである。

この児、やしなふほどに、すくすくと大きになりまさる。三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば、髪あげなどとかくして髪あげさせ、裳着す。帳の内よりも出ださず、いつきやしなふ。……世界の男、あてなるも、賤しきも、いかでこのかぐや姫を得てしかな、見てしかなと、音に聞きめでて惑ふ。そのあたりの垣にも、家の門にも、をる人だにたはやすく見るまじきものを、夜は安きいも寝ず、闇の夜に出でても、穴をくじり、垣間見、惑ひあへり。

（小学館刊新編日本古典文学全集・一八～一九頁）

かぐや姫は、わずか「三月ばかり」で成人となり、「世界の男」の求婚を受けた。明石君が「明石」巻で十八歳だとすると、「若紫」巻で九歳。高橋和夫は「代々の国の司」を、仮に二代で任期四年、良清の父が播磨守になったのが「若紫」巻であったとすると、明石君が求婚を受けたのは、一歳という「おかしな」ことになると指摘するが[20]、かぐや姫はまさにそうした「おかしな」時期に求婚を受けているのである。

異常成長譚。かぐや姫のこの異常な成長を語る話型を、そのように呼ぶのであるが、明石君もこの異常成長譚の話型によって語られているということになろう。沼尻利通は、異常成長譚について「小さい子どもが異常な成長を遂げるというモチーフの物語。異常に大きく成長するという型と異常に小さいまま成長するという型がある。どちらも常とは違う成長という意味での「異常成長」といえ、後者の場合は小さ子譚となる。神話・昔話などでは、多く異常出生の後に異常成長を遂げる」と指摘し、「超常的な身体の成長を述べることによって、主人公の超越的性格を確立するというモチーフが、この話型の原型である。異常成長とは、常人の子と違う、神の子の示現の象徴であった」と述べて、その具体例として『常陸国風土記』の晡時臥山説話のほか、かぐや姫、『うつほ物語』の仲忠、光源氏などをあげている。[21]かぐや姫は、確かに竹のなかから生まれるという異常出生譚をともなっているが、申し子譚的な性格を認められる明石君も夢とともに出生しており、そうした意味において、異常出生譚が語られているといえる。いわゆる明石君の年齢の矛盾は、むしろこうした「神の子の示現」を語るものであったと考えることができよう。物語はあくまでも人間の世界を描く。しかしながら、物語はそうした語りの伝統といったものから乖離したものでもないのであった。

ただし、明石君の場合、この異常成長譚の話型を念頭においても、すべての疑念が氷解するわけではない。明石君が生まれて間もなく求婚を受けた可能性を提示する読みは、「代々の国の司ども」を、仮に二代で任期四年としたものであった。しかし、それは「代々」という表現によって想定できる最少の国司の数であり、「代々」とは、三代以上、あるいはさらに多くの「国の司ども」をも考え得る表現である。「明石」巻で十八歳とするかぎり、そうしたとらえかたは物理的に不可能ではないか。

しかしながら、その世界によって時間の流れが均一ではないこともまた、物語の伝統が示してきたことであった。

竹取の翁は、かぐや姫を迎えにきた天人に向かって、このように言い放つ。

翁答へて申す、「かぐや姫をやしなひたてまつる事、二十余年になりぬ。『かた時』とのたまふに、あやしくなりはべりぬ。また異所にかぐや姫と申す人ぞおはしますらむ」といふ。（同・七二頁）

かぐや姫の引き渡しを迫り、「かた時のほどとてくだしし」と述べる天人に対して、翁はかぐや姫を養育して「二十余年になりぬ」と抗弁し、「また異所にかぐや姫と申す人おはすらむ」と、求める者はここにい

るかぐや姫とは別人であろうと語気を強める。この「二十余年」という時間については「かぐや姫は生まれて三か月ぐらいで結婚適齢期に達し、多くの人々から求婚されたが、その中から五人の貴公子だけが残った。その間を仮に三年とする。続いて五人の求婚者との交渉は、三年ぐらいであるらしく、その後の帝との交渉も三年あまりであったらしいから、合計十年程度であろう」として、「かぐや姫が天人ではなく、ふつうの子女であることを強調するための、翁の強弁とすべきであろう」[22]ととらえる解釈のほか、「かぐや姫は生まれて三か月で成人し、大勢の求婚者の「妻どひ」、五人の貴族の求婚、帝との交情など、一話三年を基準とした算出法によったもの」[23]ととらえる見解もあり、そのとらえ方には課題が残されてはいるが、いずれにしても、このことばは、この世と異界とでは異なる時間が流れていることを如実に示していよう。こうした此界と異界における時間のずれは、『竹取物語』にのみいえることではなく、「旧俗を遺れ仙都に遊び、既に三歳のほどを逕」た嶼子が還ってみると「三百余歳を経」ていたと語る、『丹後国風土記』逸文の浦島子伝承（小学館刊新編日本古典文学全集・四七七～四七八頁）においてもみることができるように、異界の時間は、この世のそれに比してきわめてゆっくり流れていたのであった。[24]

濱橋顕一は、「若紫」巻における明石の叙述と「明石」巻におけるそれとを比較しながら、「我々は、習慣的に年立によって、この間に流れた時間（年次）を計量するが、叙述間には、そうした年次と比べれば、おどろくほど間隙がない。むしろ、時間の経過を感じさせないのである」と述べ、とくに「若紫」巻において「かの国の前の守、新発意」（「若紫」一―二〇二頁）と呼ばれる明石入道が、「明石」巻においても「前の守新発意」（「明石」二―二三〇頁）と言われることに着目して、「若紫の噂話の入道とこの巻の入道が（したがって、両巻の、明石の入道父娘めぐる状況に関する作者の認識が）、まったく変わりのないことを明確に物語る記号である」と指摘する。[25]それが、「作者の認識」によるものかはここではおくとしても、物語の表現世界における明石は、時間の経過を感じさせない、あたかも時間が止まっているかのごとき時空として表現されていることは確認してよい。明石君の年齢の問題を含め、「若紫」巻と「明石」巻における明石に時間的経過を感じさせないということは、明石が異郷的世界であることを示している。このことをむしろ積極的にとらえるならば、明石に流れる時間表現の不可思議さは明石を異郷的世界として構築しているのであり、明石君の年齢の問題とは、彼女を異郷の女として造型する物語の方法であったととらえることができよう。

もちろん、明石の一日が都の一年にあたるといった決定的な懸隔をもつわけではなく、明石入道の父大臣が桐壺更衣の父按察大納言と兄弟であるなど、都世界の時間との連絡を緊密にとりながら明石の時間は存在している。明石は、そうした都の時間と切り結びながらも、本来数年かけて交代するはずの国司たちが何代も続けて求婚してくるにもかかわらず、その女性は変わらぬ情景のなかで妙齢な女性であり続けるといった、異郷的な時空として物語の底流に存在し続けていたのであった。

あたかもかぐや姫と同じような時空をくぐりぬけて、明石君は「十八年」生きてきた女性として物語に送り出される。明石君の年齢についてはそのようにいうことができよう。異郷にいるかぎり彼女は、あるいは永遠の時間を生きながらえたのかもしれない。しかし、ここで「十八年」と明石入道が都からきた光源氏にむかってつぶやいた瞬間、明石の時間は都の時間と同様に流れはじめるのであった。

それにしても、なぜ「十八年」なのだろうか。「十八年」のもつ物語における意義について、さらに考えてみたい。

四、約束の時

明石君は夢をともなって生誕し、明石入道はその実現を住吉の神に

ひたすら祈り続けた。そして、十八年。住吉の神は光源氏を明石の地に導き、明石一族を夢の実現へ向かわせていくこととなる。住吉の神は入道が祈願し始めて十八年目にその霊験を示したことになり、そうした意味において、明石一族にとってこの「十八年」は、忘れることのできぬ聖なる年となったとおぼしい。

「明石」巻から遠く、「若菜下」巻。物語は再び「十八年」を表現として刻み込むこととなる。[26]

はかなくて、年月も重なりて、内裏の帝御位に即かせたまひて十八年にならせたまひぬ。「次の君とならせたまふべき皇子おはしまさず、もののはえなきに、世の中はかなくおぼゆるを、心やすく思ふ人々にも対面し、私ざまに心をやりて、のどかに過ぐさまほしくなむ」と、年ごろ思しのたまはせつるを、日ごろいと重くなやませたまふことありて、にはかにおりゐさせたまひぬ。世の人、飽かず盛りの御世を、かくのがれたまふことと惜しみ嘆けど、春宮もおとなびさせたまひにたれば、うち継ぎて、世の中の政などことに変るけぢめもなかりけり。（「若菜下」四―一六四頁）

年立のうえでは四年の空白をもって、冷泉帝は退位を決意する。それは「内裏の帝御位に即かせたまひて十八年にならせたまひぬ」、その年のことであった。冷泉帝には皇子がなかったが、かねて「心やすく思ふ人々にも対面し、私ざまに心をやりて、のどかに過ぐさまほしくなむ」と思い、また重い病に悩んだ末の決心であった。世の人はそれを惜しんだものの、朱雀院の皇子であり、承香殿女御を母としてもつ「春宮」、すなわち今上帝の即位によって「世の中の政などことに変るけぢめもなか」ったと物語は語る。しかし、この御代替わりにあたって、世の人はあることに目を見張った。

六条の女御の御腹の一の宮、坊にゐたまひぬ。さるべきこととかねて思ひしかど、さしあたりてはなほめでたく、目おどろかるるわざなりけり。（同・一六五頁）

今上帝と「六条の女御」である明石姫君との間に誕生した第一皇子が東宮となったのである。もちろんこの人事は、何ら不思議なことではなく、「さるべきこととかねて思」っていたことであったが、それでも新帝の第一皇子の立太子は「めでたく、目おどろかるるわざ」なのであった。やはりそこには数奇な運命をたどった明石一族の運命が読みとられよう。

冷泉院が帝位についたのは、元服をしたばかりの十一歳の二月二十余日のことであった（「澪標」二―二八一～二八二頁）が、その同じ年の三月十六日、明石の地において明石姫君が誕生している（同・二八五頁）。この報を聞いた光源氏は、かつて占わせていた宿曜の予言を想い起こす。

宿曜に「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」と勘へ申したりしこと、さしてかなふなめり。…いま行く末のあらましごとを思すに、住吉の神のしるべ、まことにかの人も世になべてならぬ宿世にて、ひがひがしき親も及びなき心をつかふにやありけむ。さるにては、かしこき筋にもなるべき人のあやしき世界にて生まれたらむは、いとほしうかたじけなくもあるべきかな、このほど過ぐして迎へてん、と思して、東の院急ぎ造らすべきよしもよほし仰せたまふ。（「澪標」二―二八五～二八六頁）

「御子三人、帝、后かならずならびて生まれたまふべし」。実子の東宮は即位した。その宿曜によれば、いま生まれた姫君は后になるはずだ。源氏は来し方行く末に思いをめぐらす、そのなかで「住吉の神のしるべ」と明石君の「なべてならぬ宿世」を想起せずにはいられない。宿曜の予言によって明石姫君が将来后になることが予言されていたが、「住吉の神のしるべ」や明石一族の「宿世」によって、すでにそこに光源氏の運命も組み込まれ、つき動かされていたのであり、「明石」巻で入道の述懐を聞き、自らの宿世に思いを致したように、源氏はここで慄然とせずにはいられないのであった。

それから十八年。冷泉帝は退位し、明石姫君腹の第一皇子が立坊し

た。明石姫君はこのとき、十八歳。ふたたび表現されたこの「十八年」は、「明石」巻における入道の述懐を想起させつつ、それが約束の時であったことを物語に刻み込む。繰り返される「十八年」は、繰り返されることによって偶然ではないことを証し立てる。「若菜下」巻において「十八年」と記されることによって、それは明石一族にとっての聖なる年数となったのである。袴田光康は、明石君の年齢に関して、住吉の神との関わりを重要視して「少なくとも整合性の為に「いときなうはべりしより」を曲解し、明石君誕生と住吉信仰の開始とを大きく分離して、入道が源氏に語る「申し子」譚的ニュアンスを歪めることは適切でないと思われる」と述べるが[27]、その娘である明石姫君の誕生もまた「申し子」譚的といえる。その姫君がこの時十八歳であることによって、「明石」巻における明石君の年齢も十八歳であってしかるべきことがあらためて了解されてくる。十八歳とは、母明石君が住吉の神の導きによって光源氏と出会った、その年齢なのであった。

ただし、注意をしておかなくてはならないことは、「若菜下」巻における「十八年」は冷泉帝在位の期間を示す年数として記されていることである。明石一族とはかかわりのないかたちで、その年数はあるように見える。しかし、もし冷泉帝に皇子が誕生していたら、明石姫君腹の第一皇子の立坊はありえただろうか。光源氏は冷泉帝の退位に際して「おりゐたまひぬる冷泉院の御嗣おはしまさぬを飽かず御心の中に」思い、「同じ筋なれど、思ひ悩ましき御事なうて過ぐしたまへるばかりに、罪は隠れて、末の世までは伝ふまじかりける御宿世、口惜しくさうざうしく」思うのであった（「若菜下」四―一六五～六頁）が、明石入道が見た夢によるかぎり、明石姫君腹の第一皇子の立坊は必然であった。むしろ住吉の神の霊験に支えられた明石一族の「宿世」は、冷泉帝に皇子を与えないと同時に光源氏の「罪」を隠すものとなっていたのである。「明石」巻において入道の述懐を聞いた光源氏は、「浅からぬ前の世の契り」を思い、須磨流謫の理由を藤壺との罪によるものではないことを悟った。明石入道が、その時点において「十八年」の間、住吉の神に祈願しているとしたら、光源氏十歳の折からそれは始まっていることになるが、それは桐壺帝による源氏の臣籍降下の決意や藤壺の入内があったころにあたる。望月郁子は「明石入道による光保護の底に入道の一生を決定した夢の告げ（若菜上巻）があるが、それを入道に授け得たのは、宿曜の予言の顕現化をめざした桐壺帝以外には在り得まい」と述べるが[28]、おそらくそうではなく、「宿世」と呼ばざるを得ない冥々の意思が、宿曜の予言や入道の夢告によって示されていたということなのだろう。明石姫君誕生から「十八年」を経て示された「宿世」は、冷泉帝が皇子を持たぬまま退位するのとひきかえに、明石一族の夢を実現させていくものであった。その自らの運命も組み込まれた「宿世」に、光源氏は「口惜しくさうざうしく」思い、唇を噛みしめるのであった。

それにしても、なぜ「十八」年なのか。その理由は知れない。しかしながら、「十八」という数は、聖なる数としてふさわしいということはいえるだろう。

思えば、「須磨」「明石」巻における明石一族の物語にはさまざまな数字が織り込まれていたのであった。須磨に天変が巻き起こったのは、三月の上巳の祓を機としてのことであったが、それが「三月」の「上巳」の日であったことについて、石川徹は「陰暦三月は辰月、つまりは竜王の月である。又「辰」は「震」である。巳の日を用いるのは、十二支の順、子丑寅卯辰巳……と次第するからであるが、また巳は四月の正陽に配して、陰気全く去り、万物起る所から、巳は起なりとする。だから「上巳」は「震い起る」義であり、源氏の凶運極まって、今度は、陽気盛んに起り一転して吉運に向う、つまり竜運を呼んで天に昇る帰洛の時節到来を象徴していると思われる」と述べて[29]、「三月」と「上巳」の物語における意義を検討したが、伊藤博はその見解を受けつつ「霊夢と霊威が「朔日」〔ついたち・ついたちの日、ともにこの作者は第一日の意で用いているらしい〕と「十三日」、すなわち上巳と次の巳の日を二つのヤマとして至現していることは留意すべきだろ

う。三月は「辰」の月、竜王の月である。その「巳」の日、蛇神の日を軸に霊力が発動したわけである」として、「三月」「上巳」がともに住吉の神や海竜王との関係が認められる竜神・蛇神にかかわるものであることを指摘している。[30]明石入道はその述懐においても「十八年になりぬ」のほか、「年ごとの春秋ごとに」、「昼夜の六時の勤めに」などと述べ、指折り数えるようにその祈りが繰り返されていたことを源氏に語るのであった。

無限にある数は、すべてが均質な価値を持つものではない。さまざまな文化形態において、無限にある数のなかから特定の数を取り上げ、それを特化することがあるが、[31]高崎正秀は古代日本において「六」が「神聖数」であったことを指摘する。高崎は、中国文化や仏教思想などの「輸入以前から、日本民族の極めて古い時代から、六は神聖数であったと思はれます」と述べ、「神聖な神の招ぎ代として楽器――和琴の古制は六絃であり、和笛は六孔であります。六国史や六歌仙を数へ上げるのは、或いは中国風を加味した思想かも知れませんが、「祈年祭」に現れる六御県の神（高市・葛木・十市・志貴・山辺・曽布）六山口の神（飛鳥・石村・忍坂・長谷・畝火・耳無）をはじめ、延喜式あたりの重要儀礼の神具・神餞などの員数は六を軍要視してゐる例が極めて顕著であります」とし、さらに「六」を二倍した「十二」、八倍した「四十八」をも「神聖数」として認めているが、[32]この高崎の指摘に寄り添いつつ見た場合、「六」の三倍である「十八」についても「神聖数」と認めてもよい痕跡がある。たとえば、『沙石集』に「四十八願の中には、第十八こそとりわき念仏にて侍れ」（巻第一ノ十「浄土宗の人、神明を軽しむべからざる事」小学館刊新編日本古典文学全集・六二頁）とあるように、阿弥陀仏四十八願のうちで、最も重んじられたのは、「第十八願」であった。この「第十八願」は、とくに浄土教において注目され、なかでも法然は、念仏による往生を誓った願として「四十八願」の中心に据え、「王本願」「念仏往生の願」と呼び、親鸞も「至心信楽の願」としたというが、[33]「十八」という数が選ばれるためには、その数が特化されてしかるべきものであったことを推測させる。また、柳田国男は「我邦の伝説界に於いては、三月十八日は決して普通の日ではなかつた」として、柿本人麻呂や小野小町の忌日とされる「三月十八日」のほか、「九月十八日」などの「十八」に着目しているが、[34]そもそも毎月「十八日」は「観音供」が行われる日でもあった。[35]あるいは、『義経記』は、弁慶は母の胎内に「十八月」いて生まれたと語り、[36]生まれた当時から二、三歳の風情で、髪が長く伸び、歯も生えそろっており、「さては鬼神ござんなれ。彼奴を置きては、仏法の仇となりなん」とされる（小学館刊新編日本古典文学全集・一一二頁）、その異常出生譚を彩っている。

これらの「十八」が選ばれた事由についてはさまざまに考えられようし、そのことをもって明石の「十八年」が明らかになるものでもなかろう。明石一族の物語に刻み込まれる「十八年」は、しかし、一族を夢の実現へと向かわせていく冥々の力の示現の時としてふさわしい数であったということはできよう。ただし、「十八」がさまざまな文化形態のなかで唯一の「神聖数」ではないということは忘れてはならない。明石君の誕生から「十八年」、明石姫君の誕生から「十八年」と、物語に「十八年」を刻みつけながら明石一族を夢の実現へと向かわせていくことによって、「十八」が明石一族にとって他に代えがたい神聖な数として顕ち現れてくるのであり、その数がひとたびならず刻み込まれることによって、夢の実現が住吉の神をはじめとした冥々の力によることを示されるとともに、その力を突き動かすまでの祈願を積み重ねてきた、筆舌に尽くしがたい入道の祈りの日々と苦難に満ちた人生史が照らし返されるのである。

住吉の神への立願から十八年。明石の浜に降り立った光源氏は、明石君と出会うこととなる。この時の明石君を十八歳と見ることによって、その造型はどのように考えることができるのであろうか。

五、十八歳の明石君

『枕草子』には「十八九ばかり」の女性について、次のような記述がある。

十八九ばかりの人の、髪いとうるはしくて、たけばかりに、裾いとふさやかなる、いとようこゑて、いみじう色しろう、顔愛敬づき、よしとみゆるが、歯をいみじうやみて、額髪もしとゞになきぬらし、乱れかゝるもしらず、面もいとあかくて、おさへてゐたるこそいとをかしけれ。

（岩波書店刊新日本古典文学大系『枕草子』一八一段「やまひは」）

「十八九ばかりの人」で、髪も長く整い、色も白くてかわいらしい顔の人が歯痛に苦しむ様子が描写されているが、その「をかし」さを活写するためには、やはり「十八九ばかり」という要素は欠くことのできないものとしてあろう。髪や肌つき、あるいは顔の様相に並んで記述される「十八九ばかり」の年齢は、なにかしらの類型的な印象を与えるものとしてあったとおぼしい。時代は下るが、中世歌謡のなかで歌われる「十七八」の歌は、「女の肉体の輝きをのびのびと謳歌する」ものであったといわれ[37]、そこにおける「十七八」という年齢は、女盛りの類型的な表現であった。『枕草子』において「十八九」と表現された時、そこには妙齢な女性の身体が顕現しているのである。

『源氏物語』における年齢記述は、物語の時間進行ばかりではなく、その人物の造型や物語展開にふかく関わっていると考えられる[38]。もちろん年齢における成熟度は個人よって異なるのであるが、そうであれば、逆にその年齢を基準として、そこから逸脱するその人物個別の資質も浮かび上がってもこよう[39]。「明石」巻において、明石入道が「十八年」を口にした時、光源氏は「前の世の契り」に思いを致しながら「心細きひとり寝の慰めにも」と、明石君への興味を示す（「明石」二―二四七頁）が、そこに「十八歳」の女性の身体が思い浮かべられていなかったとはいえまい。源氏のそのことばを聞いた明石入道が「限りなくうれしと思」っていることから推せば、そもそも入道が「十八年」という年数を源氏に明かしたこと自体、源氏のそうした興味を引き出すためにあったかとも思えるほどである。

「十八歳」の女は、しかし、その一方で命を失う女でもあった。『万葉集』巻第五に載せる山上憶良の「沈痾自哀文」には、「十八歳」で死ぬ女が語られている。

志怪記に云はく、「広平の前の大守北海の徐玄方の女、年十八歳にして死ぬ。その霊馮馬子に謂ひて曰はく、『我が生録を案ふるに、寿八十余歳に当たる。今妖鬼に枉殺せられて、已に四年を経ぬ』と。ここに馮馬子に遇ひて、乃ち更に活くこと得たり」といふはこれなり。……

（小学館刊新編日本古典文学全集『万葉集』二―八〇～八一頁）

『志怪記』によるとされるこの話は、「年十八歳にして死」んだ女が、本来は「八十余歳」の寿命を持っており、それを男に語って遇うことによって生き返ったというものである[40]。『志怪記』は六朝頃の小説でその全貌は不明であるものの、同様の記事は『法苑珠林』『搜神後記』『異苑』などに載せられているというが[41]、この話とは逆に「十八」が寿命とされながらも、「八十」まで生きながらえる話もある。昔話では「子供の寿命」という話型としてとらえられているが、その話型は、旅僧（乞食、鳥の鳴き声）に娘の命は十八歳までといわれ、教えられた延命法の通りに、娘が後生の国に行き、八十八歳（七十三）の命をもらうといったものである[42]。こうした話は、もちろん、それぞれの話における細部には異同があり、たとえば、『古事談』「性信親王ノ御寿命ノ事」（巻三ノ五二）では、宿曜の勘文に「御寿命十八をもつて限りとなすべき由」があった性信親王が「十八歳の春、尊勝の法を修して祈請せしめ給ふ」時に、ある人が、炎魔王宮で火事がおこって「十八」の「十」の字が焼けてしまったという夢を見たが、そのためか性信親王は「八十の御歳」まで生きたとする話（古典文庫・上・二六一～二

六二頁）を載せ、ここでは生きながらえるものは男となっている。また、『捜神記』巻三第五四話に載せる話は、若死の相があわられていた顔超という少年が、管輅の指示通りに行動し、北斗星と南斗星の化身によって十九歳の寿命を九十歳にしてもらう[43]といったものであり、「十八歳」ではなく「十九歳」となっている。そのほか「十七歳」となっているものもあるが、この話型を検討した丸山顕徳は「この子供（青年）が若死にするという年齢が七歳または十七歳の場合が、長生きの年齢七十七歳である。八歳または十八歳の場合が、八十八歳。さらに、十九歳の場合が、九十歳となっている。これは、七十七歳が喜寿の祝い、八十八歳が米寿の祝い、九十九歳が白寿の祝いというように、それぞれの年祝いから逆に若死にの年齢が判断されているようである」と述べ、さらに「沖縄や鹿児島、岩手や秋田など比較的古型をもつと思われるものに八十八歳のものが多いのも特徴的なことである」とし、「十八歳」の型が比較的古いものであるとしている。[44]

「十八歳」で死んで甦る話も、寿命が「十八歳」とされながらも生き延びる話も、「十八歳」という年齢が生死にふかく関わっていることを示唆している。『拾介抄』には厄年が記されているが、そこには「十三」「二十五」「三十七」「六十一」「八十五」「九十九」があげられている（新訂増補故実叢書）ものの、「十八」の数はない。しかし、関根賢司は、十九歳で死んだ夕顔にふれながら、「七歳が十二支というサイクルの折返し点であったように、十九歳は二週目の折返し点であるから、十九＝重苦＝厄年という観念の成立する以前に、その素地として、危険な年齢というふうに考えられていたのであろう。七歳、十三歳、十九歳、二十五歳……、成長するとは、その折り目ごとに死と再生を繰り返していくことにほかならないのだ」として、厄年以前の観念において七歳、十三歳、十九歳などが生死の境目の年齢としてあったととらえる。[45]このことを援用して考えるならば、「十八歳」もまた、ひとつのサイクルの境界にある年齢であったということができよう。三角洋一は、『風姿花伝』第一「年来稽古条々」にふれながら、平安朝における女性の成長段階について考察したが、それによれば、「三～五歳の袴着、七歳で身を入れてまなぶ習いごとをはじめ、十二三歳で裳着、十七八歳からが成人で二十四五歳あたりまでが結婚適齢期、これを過ぎると家刀自として子女の養育に腐心する」ということになるという。[46]「十八歳」は、成人となり、結婚適齢期に入る、その境界にある年齢なのである。生を謳歌する身体と死の世界にひかれる身体。「十八歳」の身体とは、人々を惹きつけてやまぬ魅惑と、いつ異界に飛び去るかわからぬ危うさとを、ふたつながら抱え込んだものであったのである。

思えば、明石君は「この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね」と常に遺言されていたのであった。明石の浜に降り立った光源氏に逢うことがなければ、明石君はその遺言のとおり、海に入っていくことであろう。入道のことばによって光源氏が感じた明石君とは、まさに死の世界にひかれながらも、見果てぬ望みに美しく命を燃やす女性の姿であったことであろう。

明石の十八年。それは、日々の六時の勤めの折に祈り、春秋のたびごとに祈願し、ただひたすら祈り続けた、明石一族の「十八年」であった。その「十八年」を捧げることによって、住吉の神をはじめとした冥々の力は光源氏をこの浜に導き、夢の実現の端緒を示すのであった。しかし、一族の夢が実現するためには、さらに多くの年月と祈り、そしてさらなる苦悩を積み重ねていかなくてはならない。明石君は滅びをも内包した「十八歳」の身体をもって明石の浜にたたずんでいるのであった。

注

（1）『源氏物語』の引用は、小学館刊新編日本古典文学全集に拠り、巻名、巻数、頁数を付す。

（2）この噂話の意義については、竹内正彦「海に入らぬ女―明石入道の遺言と明石君―」（「國學院雑誌」九一―四・平成二年四月）。

（3）明石君の年齢をめぐる研究史については、濱橋顕一「明石の上の

年齢をめぐって―作中人物の年齢の問題―」（『源氏物語論考』笠間書院・平成九年）等を参照。

（4）「明石一族の栄華とは何であったのか」「国文学」二五―六・昭和五五年五月。

（5）『源氏物語研究序説』東大出版会・昭和三四年・七三五頁。

（6）「少女と結婚」『物語の結婚』創樹社・昭和六〇年・一八～一九頁。

（7）「明石一族との出会い―明石・澪標」「国文学」三二―一三・昭和六二年一一月。

（8）「明石一族の物語」『『源氏物語』の創作過程』右文書院・平成四年。ちなみに、その年齢の算出方法は「私説下限は、この「代々の国の司」の求婚の初めを娘十二歳と置いて推定した数字」であり、「私説上限は、仮に明石御方の年齢を四歳年上とした数字」で、「葵上の年齢を転用した」という。また、梅野きみ子は、高橋和夫説を支持しつつ「若くて二十六歳、上限は二十九歳か」とする（「明石の君の人間像」『王朝の美的語彙―えんとその周辺　続』新典社・平成七年）。

（9）ただし、高橋和夫は前掲論文で、「松風」巻における「君のやうやうおとなびたまひもの思ほし知るべきにそへては、などかう口惜しき世界にて錦を隠しきこゆらんと、心の闇晴れ間なく嘆きわたりはべりしままに、仏神を頼みきこえて、さりともかうつたなき身にひかれて山がつの庵にはまじりたまはじと思ふ心ひとつを頼みはべりしに」（「松風」二―四〇五頁）という入道の述懐をとりあげ、明石君が「やうやうおとなび」た後に、「嘆きわたりはべりしままに」「仏神を頼みきこえ」たと読みとり、「入道が住吉信仰をはじめたのは、どうも娘が「やうやう大人び」「もの思ほし知るべき」年頃になってからではないのか」とするが、このことについては、「嘆きわたしはべりし」と「心ひとつを頼みはべりし」は対の構造となっており、嘆きつつも頼みとしていたというように、その二つの要素が同時並行的に存在したと解釈することができるのではなかろうか。

（10）「明石入道の造型について―仏教観の吟味として―」『源氏物語の探求』五・風間書房・昭和五五年。

（11）濱橋顕一前掲論文。

（12）岩波書店刊日本古典文学大系「明石」二―七四頁・頭注。

（13）岩波書店刊新日本古典文学大系「明石」二―六八頁・脚注。

（14）玉上琢彌『源氏物語評釈』「明石」三―一九七頁・注。

（15）小学館刊日本古典文学全集「明石」二―二三四頁・頭注。

（16）『完訳』は「明石の君の年齢。彼女は、すでに若紫巻で結婚適齢期なのに九年後のここで十八歳は不自然。両巻とも、源氏にふさわしい妙齢の女性であるべき必要からの矛盾か」（「明石」三―七六頁・脚注）とし、『新編全集』も「後の若菜上巻によれば、入道が娘の将来に関して霊夢を蒙ったのは、娘が母の胎内に宿った時で、それを機に入道は立願したらしい。以来十八年だから、娘の年齢も今それと同じであろう。右の若紫巻の記述とは矛盾するが、ここは結婚適齢期の美女を登場させる必要から、前後の統一を無視したか。構想の整合性よりも局面や場面の効果を重んずることは、当時の物語に珍しくない」（「明石」二―二四五頁・頭注）として、同様の立場をとっている。

（17）このほか、たとえば、坂本共展は「十八年」をまる十八年と解して明石巻での明石君を十九歳として、紫上と同年と考える（「五つの大臣家と明石入道」『源氏物語構成論』笠間書院・平成七年）。

（18）「播磨前司、明石の入道」『講座源氏物語の世界』三・有斐閣・昭和五六年。

（19）「明石とかぐや姫」『源氏物語批評』有精堂・平成七年・二一六頁。

（20）高橋和夫前掲論文。

（21）「異常成長譚」林田孝和ほか編『源氏物語事典』大和書房・平成一四年。

（22）小学館刊新編日本古典文学全集『竹取物語』七二頁・頭注。

（23）室伏信助訳注・角川文庫『新版　竹取物語』五九頁・脚注

（24）「若紫」巻における北山の表現を検討した秋澤亙も、その異郷的な時空にはゆっくりと時間が流れていることを指摘している（「北山幻想―『源氏物語』若紫巻の表現と時空―」『論叢源氏物語』四・新典社・平成一四年）。ただし、小松和彦は、「時間の流れがまったくないかもしくはきわめてゆっくりな世界としての異界の源を

たどってゆくと、古代中国で説かれた「仙界」（神仙界）にまでさかのぼることができるだろう。竜宮世界という異界観には神仙思想が色濃く浸透しているのである」としながらも「日本の民俗社会の異界の時間がこうした中国の神仙界的な時間としてのみ語られていたわけではない。仙界とはまったく逆の人間界の一日が異界の一年に相当するといったように、人間界より速く流れる世界もあったのである。狐の世界に入り込んだ『今昔物語』の賀陽良藤の話を思い出していただきたい。良藤は、十三年間狐が化けた美女と同棲生活を送ったと思っていたが、発見されてみるとわずかに十三日間のことであった。つまり、人間界の一日が異界の一年といったような、異界の時間の方が急速に流れるという異界観も存在していたのである」として異界とこの世の時間のあり方が可逆的であることを指摘する（『神隠し―異界からのいざない』弘文堂・平成三年・一七七～一七八頁）。

(25) 濱橋顕一前掲論文。

(26) 伊藤博もこの「十八年」の符合に注目している（「冷泉帝から今上帝へ」『源氏物語の基底と創造』武蔵野書院・平成六年）。

(27) 「明石物語の人々とその原点―「明石」巻の諸問題と研究史的展望―」『源氏物語の鑑賞と基礎知識　明石』至文堂・平成一二年六月。

(28) 「末世の聖帝桐壺の意志と須磨・明石の天変」『源氏物語は読めているのか―末世における皇統の血の堅持と女人往生』笠間書院・平成一四年・五三頁。

(29) 「光源氏須磨流謫の構想と源泉―日本紀の御局新考」『平安時代物語文学論』笠間書院・昭和五四年・二七三頁。

(30) 伊藤博前掲注(7)論文。

(31) 日本における数のとらえ方については、郡司正勝『和数考』（白水社・平成九年）などがある。

(32) 「お正月の話」『金太郎誕生譚』著作集七・桜楓社・昭和四六年・四六八～九頁。なお、「十二」と「四十八」については「聖徳太子の冠位十二階の昔から、仏教では薬師如来の十二神将・十二因縁・十二天などもそれだ。六の倍数、それを又一つ倍数にすると角力の四十八手や弥陀の四十八願が出て来る訣です。人が死んでから四十九日といふ行事、あの行事も四十八で一先づ完全になり、もう一つ上の四十九を算へたものでせう。この様に考へて来ると、キリストを裏切つたユダ、あれがゐたから十三日の金曜日はいけない、〝最後の饗宴〟の人数はしかじかといふ風に西洋人は思ふらしいが、もともとキリストの使徒は十二人でよかつたのではないか、印度と同じく伯来も神聖数は十二であります。それが基督教の方に引継がれて行つてゐる。信州諏訪の御柱祭りは七年目、六年を一つの単位と見て、その次の年に建てかへるのでせう。一週間七日といふ考へ方も六日で一つ纏まり、次の安息日を数へるからかと思ひますが、その六の倍数で一年は十二ヶ月、その外十干十二支などなど。色々むづかしい問題に発展しさうですから、これは省略せねばなりませんが、この様に神聖数の問題は根が深く、かつ世界的に広汎であり、それが今日もなほ我々の生活を規律してをります」と述べている。

(33) 中村元ほか編『岩波仏教辞典』岩波書店。

(34) 「目一つ五郎考」『定本柳田国男集』五・筑摩書房。

(35) 「観音供」は、平安時代にはすでに年中行事としてあったようであり、池田亀鑑は「正月十八日、東寺の長者が仁寿殿において、観音像二体を安置し、この事を勤める。里内裏の時は真言院にて行なわれる。その起源は詳らかでない。延喜十八年（九一八）正月に行なわれた記録が見えるので、これより以前であることは明らかである。天徳四年（九六〇）、内裏炎上の時、仏像焼失せるによって、応和二年（九六二）六月十八日、観音の像一体を仁寿殿に安置せられ、仁和寺の寛空僧正によって開眼供養がなされた。天子のための御祈である。昔は「夜居の僧」とて清涼殿内の二間に召し置かれて御加持がなされたのである。この行事は毎月恒例の行事である」（池田亀鑑『平安時代の文学と生活』至文堂・昭和五六年・五三〇頁）と解説している。なお、『今昔物語集』は「十八日」を媒体にして観音と竜宮が結びつく説話を載せる（巻第十六「仕観音人行竜宮得富語第十五」）が、あるいはそうしたところから「十八」と明石一族とのかかわりを考えることも可能なのかもしれない。

(36) なお、御伽草子『橋弁慶』は「三十三か月」、『じぞり弁慶』『弁慶物語』は「三年三か月」とする（小学館刊新編日本古典文学全集『義経記』一一二頁・頭注）。

(37) 植木朝子「十四歳をうたう歌謡―『宗安小歌集』の二首をめぐって―」「日本文学」四八―九・平成一一年九月。

(38) 『源氏物語』における年齢記述について、伊藤一男は「あるときには物語の時間進行の目盛であったり、またあるときにはその人物の性格設定に参与したり、物語におけるその人物の存在の意味を象徴的に表したりする。年齢が語られることでその人物の性格の一端が表されたり、年齢によってその人物のこれからの行動が暗示されることさえある。特に、物語を読み解く場合、このことははなはだ重要な要素であると思われる」と指摘する（「『源氏物語』の年齢記述」「学芸国語国文学」一三・平成三年三月）。

(39) 「それほど若くはあるまい」とされる明石君の描写（梅野きみ子前掲論文）についても、こうした観点から考えるべきものであろう。

(40) 「沈痾自哀文」には、続いて「寿延経に云はく、「比丘有り、名を難達といふ。命終なむとする時に臨み、仏に詣でて寿を請ひたるに、則ち十八年を延べたり」といふ。ただし善く為むる者は天地と相畢はる。その寿夭は業報の招く所にして、その修き短きに随ひて半ばと為る」とあり、「十八年」の寿命を延ばした「難達」の話にもふれる。「十八歳」「十八年」と、「十八」が繰り返される点が興味深い。

(41) 小学館刊新編日本古典文学全集『万葉集』二―八〇頁・頭注。

(42) 関敬吾ほか編「昔話の型」『日本昔話大成』一一・角川書店。

(43) 竹田晃訳『捜神記』東洋文庫。

(44) 「北斗七星と南斗六星の伝承」佐野賢治編『星の信仰』渓水社・平成六年。

(45) 「年齢」『物語表現　時間とトポス』おうふう・平成六年・一二三～一二四頁。

(46) 「歌まなびと歌物語」「国語と国文学」六〇―五・昭和五八年五月。